教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第６号（通算第２５号）
平成２７年９月２５日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

９月１１日、全天候型トラックに改修された“三条・燕総合グラウンド”で行われました。
時折強い雨が降る中、市内２１小学校の６年生８８４人（２小学校は５年生も参加）が熱戦を繰り広げました。（写真は女子８０ｍハードル走）

第１１回三条市小学校親善陸上大会

実りの秋に向けて　－子どもと共に授業の充実を－

小中一貫教育推進課指導主事　本多　真人

４年生の社会科を担当していたときのことだ。さわやかな秋晴れの日の３時間目、「火事を防ぐ～消防のしごと～」の授業中だった。副読本の「【消防本部の人の話】火災発生の通報があるとおよそ１分で出動します。」を読んだＳさんが驚いたように声をあげた。「絶対無理。１分じゃ無理だよ。だって自分は毎朝着替える時、どんなに急いでも３分ぐらいかかるよ。１分じゃ出動できないよ。」すると、「でも早く行かないと全部焼けてしまうよ。」「早着替えの練習とかしているのかな。」「そういえば、消防署の前を通ったら訓練みたいなことをしているのを見たことがあるよ。」「きっと何かしているな。」「練習とか工夫とかしているな。」と、子どもの発言は続いた。そして、「◎」は「消防隊の人は早く出動できるようにどんなことをしているのか」となり、消防本部見学へ出かけることになった。

見学から帰校した子どもたちは、私を見つけるとすぐに駆け寄り、見学の成果について堰を切ったように話し出した。訓練や練習の内容はもとより、建物・施設のつくり、道具の保管方法、消防隊員の衣服のたたみ方や置き方まで、自分が見つけた「消防隊の工夫」を詳しく教えてくれた。見学は子どもにとってとてもおもしろく、意味や価値のあるものだったようだ。

子どもは学ぶ意味や価値を見出すと、目的をもって身の回りの人・もの・ことにかかわろうとする。学ぶ意味や価値は、他と協働して「◎」（学習問題・学習課題）をつくる過程で見出されることが多い。「◎」づくりは、その子なりの捉え（感じたこと、思ったこと、考えたこと）を、他とつなげたり比べたりして「明らかにしたいこと」を見つける作業だ。捉えはその子の見方・考え方の表れであり、子どもそのものである。その子なりの捉えを大切にすることは、主体的に学ぶ（意味や価値を見出す）ことを支え、さらには、自己肯定感、自己有用感、所属意識の感得へとつながる。

「勉強の秋」が来た。じっくりと授業に取り組み、子どもと学級集団を育て、教師も腕を上げるチャンスだ。子どもと共に成長し、子どもにも教師にも大豊作の「実りの秋」にしたいものだ。

第1回hyper－QU研修会 （8月4日、三条市中央公民館）

過去２年間大好評だった標記研修会を今年度も開催しました。講師は引き続きＱＵ創始者の河村茂雄早稲田大学教授。『hyper-QU の結果分析を基にチームで取り組む学年・学級経営』という演題で９０分間熱く語られました。以下要約です。

冒頭、「Q-U は教員が実践を俯瞰してみるための手段である。言わば人間ドックと同じで、得られた情報をもとに行動に移さなければ“宝の持ち腐れ”である。」と強調されました。

◆Q-U の結果をもとに特別なことをやるわけではない！

- 児童生徒、学級集団の状態を適切に実態把握し、その上で計画的な学級集団づくり、人間関係の育成を通して児童生徒個々の学習の成果を向上させようという取組。大事なのは、教員の自発性と教員の取組を支える教員組織。
- あたりまえにやっている日々の教育実践（チャイム着席等）のあたりまえの質とレベルを向上させていく取組が重要。Q-U は児童生徒、そして教員の支援ツールである。Q-U の結果を全て使う必要はないが、全く使わないのは論外！

◇Q-U の取組を支える教員の力量

①年間のスタンダードな学級集団づくりの方法論をもっている。
②個別対応が必要な児童生徒を発見し適切に対応する方法論をもっている。…全体の中で
③学級集団の状態に合わせた授業の展開の仕方をもっている。

◇学級集団に所属する子どもたちの学力向上の必要条件と十分条件

十分条件
学習活動の質・量
授業の内容・構成・展開

必要条件
学級集団の状態の安定
ルールの確立
リレーションの確立

◇学力の育成には、学級集団の状態が左右する

○どんなにいい教材、授業プログラムを用いようとも、学習環境である学級集団の状態が悪ければ、その効果は少ない。
○教育力のある学級集団を育成する。
○学級集団の状態にあった授業の展開を工夫する。

◆個別対応のポイント

- 教員のアセスメントを共有化するための指標
- 教員間で児童生徒への援助に差が出ないようにする
- 具体的な対応に関するプログラムとその共有化
- １次、２次、３次対応について、①誰が、②何を、③どのように、④どこまでやるのか、について明確にする。

◆集団への全体指導ポイント

- 学年団、学校全体で各学級の状態を共有し、対応の方向性をそろえる。
- 集団の型を把握し、ルール、リレーションの状態を明らかにし、足りない対応を意識的に補う。
- 集団発達の段階に合わせて、児童生徒が不安なく次の段階に進んでいくための取組を意識的に仕組む。
- 学級内の児童生徒のソーシャルスキルの状態を把握し、授業や行事等の展開方法に工夫を加える。

※　ポイントは、現在地に合わせた目標設定
取組は１つか２つにしぼって、確実にやりきること

【受講者の声】

- 学校教育の基盤は学級経営であり、「学級経営のうまい人から学ぶ。」「それを全校体制で取り組むこと。」が大切であることを確認できた。学級経営の力量を高めるべく自校で取り組みたい。
- 現在学校評価を進めているのでとても参考になった。何から始めてよいか分析をしっかりして課題を明確にしながら互いの実践を語り合いながら学び合っていきたい。大変勇気付けられる研修だった。
- 教員自身、やる気と自主性をもって、明るく楽しく学級経営をすることが大切なのだと改めて教えていただきました。がんばろうと思える研修会でした。
- 教職に就いて２年目ですがグサグサくるお話が多かったです。チームとはどういうことなのか考え直すきっかけになりました。うまく学級経営をされている先輩からたくさんの技を教わっていきたい。

「学級づくり」～ルールとリレーションのバランスを大切に～

小中一貫教育推進課指導主事　大西　聡子

生徒指導訪問で、学級担任の先生方とお話をする時間はあまりもてません。

けれども、教室を訪問させていただくと、先生方が子どもたちと共に学級をつくり上げようとされている雰囲気やそこに流れる温かさを感じることができるような気がします。

学級づくりの取組を窺い知るものに、教室の掲示物があります。学級目標や学習の足跡のほかに、どのような掲示がなされているのかとても楽しみにしております。温かい言葉が散りばめられた大きな木、子どもたちが工夫を凝らした係活動のポスター、担任からの熱いメッセージ等々があります。それらは、学級の様々な取組やその経過、成果が分かり、子どもたちの目を引くアイディアに溢れています。

学級目標の達成へ向け、時機や学級の状況に応じた具体的で取り組みやすい工夫をされているのです。子どもたちが意欲をもち一丸となって取り組んでいる姿や支え合っている姿が目に浮かびます。また、担任の先生と学級の子どもたちと共に学級づくりに励まれている様子やそこに寄せる思いや願いが溢れているのを感じます。

まるで掲示物が、学級の活気や思い・願いを発信してくれているようです。

このことから、担任の先生方との対話がなくとも、先生方と子どもたちが日々努力されている様子を感じることができ、感謝と温かい気持ちを胸に抱いて学校をあとにすることができるのです。

さて、話は変わりますが、夏季休業中に hyper-QU を用いた学級づくりの研修会に参加された方もおられると思います。研修会の講師としてお招きした早稲田大学の河村教授による「hyper-QU の結果分析を基にチームで取り組む学年・学級経営」というテーマのご講演でした。具体的な事例をあげながら、教員組織として学年・学級経営に取り組むこと、児童生徒同士や児童生徒と教師の人間関係を良好にすること、規律と親和のある学級集団を育成することの大切さを教えていただきました。そして、hyper-QU から分かる学級の状態として、満足群にプロットする児童生徒数の増加が学習や学校生活に意欲的に取り組む姿となって表れ、学力向上につながるということを学びました。

チームで取り組むことの重要性は言うまでもありませんが、その中で学級経営をどのように行うかということが要になるのだろうと思います。

河村教授の著書に次のような記載があります。「学級集団に必要なのは、子どもたちが安心して過ごせるためのルールと、互いの存在を認め合い尊重し合うあたたかい人間関係（リレーション）です。『ルールとリレーションの両方をバランスよく集団に確立させること』こそが、学級集団を育てることにおいて、最も重要であります。」夏の研修会でお聴きしたご講演と言葉こそ異なりますが、同様のことを訴えています。

ルールとリレーションが共に確立していると、子どもたちの２つの得点は高くなり、プロットの分布が右上側つまり「学級生活満足群」に散らばります。反対に、確立していなければ、２つの得点は低くなり、分布が左下「学級生活不満足群」に散らばることになります。hyper-QU を活用した学級づくりが多くの成果をあげているのは皆様ご存じのとおりですが、ルールとリレーションのある集団づくりが学級経営上とても重要なことが、河村先生による調査の統計データに裏付けられています。

２学期がスタートして一月が経ちます。行事が多い２学期ですが、バランスのよいルールとリレーションという視点をもち、子どもたちが安心して過ごせるあたたかい学級づくりをお願いします。

参考文献：「データが語る①学校の課題」河村茂雄　図書文化(2007.8)

防災キャンプｉｎ三条　～本成寺中学校区～

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

昨年度に引き続き実施した標記事業の概要をお知らせします。

◇目的　児童生徒が自宅等で被災した場合に、自らの危険を回避できるよう、技術や知識を学習させ、“生き抜く力と姿勢”を育む。

◇主催　　三条市教育委員会　小中一貫教育推進課

◇期日　　７月２９日（水）３０日（木）※非常に蒸し暑い日でした。

◇会場　　月岡小学校を中心とした各施設

◇参加者　本成寺中学校区の児童生徒３１名（希望者）

◆内容　　主なものを記しました！

【マップ大作戦～危険箇所探検ツアー＆安全マップ作成活動～】

・西鱈田小学校、月岡小学校区内の洪水時危険箇所を探索し、ガイドの方から説明を聞きました。（写真①）

・探索グループごとに集合し、大型地図に危険箇所探索で学習した内容、避難する場合の留意事項等を書き込みました。（写真②）

【昼食：非常食体験】

【プロジェクトアドベンチャー】

・いくつかの集団づくりゲームを通してお互いの理解を高めたり、仲間と協力したりすることの関係づくりをしました。（写真③）

【選択プログラム～避難所づくり体験～】

・「施設班」「福祉班」「調理班」に分かれて、避難所開設体験活動を行いました。各班の活動内容を聞いた後、班を選択しました。

・「施設班」は、調理をするためのテント設営・火起こし（写真④）と宿泊場所の窓に暑さ対策の網戸を張りました。

・「福祉班」は、重り・ゴーグル・耳栓等を身に付けることでお年寄り体験をし、洪水時のお年寄りの避難について考えました。（写真⑤）

・「調理班」は、炊き出し・非常食作りの準備をしました。

【洪水時の水流体験】

・実際にプールに入って、水流に逆らって歩いたり、ズボンをはいて歩いたりする時の水の抵抗力の強さを体感しました。（写真⑥）

【夕食：避難所の炊き出し食事体験】

・どのような食材でどのように調理したかを学びながら、調理班が調理した食事をいただきました。（写真⑦）

・各班で後片付けをしました。「洗い物」「ゴミ処理」「物干し」等。

【ナイトプログラム】

・語り部さんによる体験談。南四日町自治会長の上石貞夫さんから、7.13 水害時の被災状況やその時に体験した逸話などをお聞きし、感想を述べたり疑問点を質問したりしました。

・選択プログラムの体験で学んだこと（発見、気付き、疑問、など）を模造紙にまとめました。その後、翌日の発表会の準備をしました。

【就寝：避難所就寝体験】　月岡小学校のプレールームで就寝

【起床・ラジオ体操・朝食の準備・避難所整理整頓】

【避難所閉鎖体験】【朝食：避難食体験】

【選択プログラム学習振り返り発表会】

・模造紙を利用して発表会。群馬大学金井先生から講評を受けました。

【救命救急講習会・スキルトレーニング】　↓（写真⑧）

・けがなどへの応急措置、被災時のけが人搬送方法を学びました。

【閉会式】　修了記念品（非常食）及び修了証書の贈呈　解散